

熱中症を契機としたパニック発作・不安障害に 柴胡加竜骨牡蛎湯が奏効した一例



磯山 響子 先生

札幌医科大学 医療人育成センター 教育開発研究部門 兼 産婦人科学講座

2008年 札幌医科大学医学部 卒業
2010年 小樽協和病院 産婦人科
2012年 札幌社会保険総合病院(現・札幌北辰病院) 産婦人科
2013年 函館五稜郭病院 産婦人科
2014年 市立釧路総合病院 産婦人科
2015年 札幌医科大学 産婦人科

はじめに

心身の不調を有する患者が月経遅延や更年期障害との関連を自ら疑って、産婦人科を受診するケースは少なくない。内科的異常を伴わない動悸や呼吸苦、不安症状に対し、産婦人科で初期対応を求められる場面がある。

熱中症は動悸や息切れ、恐怖、不快感など、パニック症状に類似した症状を呈することがあり、熱中症後に不安症状が誘発されることや、既存の不安障害が増悪する可能性も指摘されている。特に予期不安を伴う例では、不安症状の慢性化を防ぐための初期対応が重要であり、漢方薬が有用な手段となり得る。

症 例

症 例：42歳 女性。

主 訴：発作的な呼吸苦、動悸、不安感、月経遅延。

合併症：陳旧性脳梗塞、脂質異常症。エソメプラゾール、アトルバスタチン、抗凝固薬を服用。

現病歴：X年8月某日、熱中症を契機に動悸、呼吸のしづらさ、手足のしびれ、強い不安感が出現し、救急病院に搬送された。補液で回復したが、帰宅後も体調不良が続いていた。

約3週間後、同様の発作様症状が誘因なく出現し、再度救急病院へ搬送された。それ以降「また発作が起こるのではないか」という予期不安が強くなり、食欲低下、気分の落ち込み、全身倦怠感が持続した。月経が1ヵ月以上遅れていたことから、更年期障害の可能性を考え、産婦人科を受診された。

身体所見／東洋医学的所見：図1に示す。

臨床経過(図2)：虚実中間から実証、肝気鬱結、胸脇苦満、臍上悸を目標に柴胡加竜骨牡蛎湯 18錠/日(分3)を処方した。また、クロチアゼパムを不安時頓用としていた。

2週間後の受診時には発作症状はなく、不安感が軽くなった。食欲、便通も改善し、月経も来ている。SRQ-Dは10点と著明に低下した。7週間後には体調は良好で、月経周期も安定していた。その後も体調は安定し、漢方薬を服用しない日も出てきたため終診となった。経過中、クロチアゼパムは一度も使用されていない。

図1 症例 42歳 女性

主 訴

発作的な呼吸苦、動悸、不安感、月経遅延。

合併症

陳旧性脳梗塞、脂質異常症

内服薬

エソメプラゾール、アトルバスタチン、抗凝固薬(詳細不明)

身体所見

身長 165.0cm、体重 65.0kg(BMI 23.9)、血圧 122/72mmHg^{*1}、脈拍 83回/分。※1 救急病院搬送時の収縮期血圧は177mmHg。婦人科的診察にて異常所見を認めず。子宮内膜は分泌期様であった。

東洋医学的所見

脈候：虚実中間、弦

舌候：舌縁紅、白黄苔

腹候：腹力3/5、臍上悸(+)、胸脇苦満(+)

寝付きは良いが熟眠感なし。便秘傾向。

初診時SRQ-D(東邦大学式抑うつ自己評価尺度)^{*2}

21点 ※2 16点以上で抑うつ傾向あり。

考察

柴胡加竜骨牡蛎湯は、肝気鬱結の病態に対して胸脇苦満・煩驚を目標に用いる処方であり(図3)、構成生薬の柴胡・黄芩は肝気を疏泄して気の停滞を是正、竜骨・牡蛎は精神不安、驚きやすさ、動悸を軽減、桂皮・茯苓は気逆や動悸に対応する。

目黒道琢の『餐英館療治雑話』の記載を手がかりに、パニック発作様症状への対応について図4にまとめた。柴胡加竜骨牡蛎湯は、発作に対する不安・緊張で胸苦しく、肝鬱が想定される場合に適すると考えられる。一方で、衝き上げるような動悸発作を頻回に呈し、めまいを伴うような水気上逆の病態には、苓桂朮甘湯や奔豚湯などが適すると考えられる。

結語

柴胡加竜骨牡蛎湯はパニック発作とその後の予期不安を呈する病態の初期介入として、不安症状の慢性化を防ぐ有用な治療選択肢となり得る可能性が示唆された。

図2 臨床経過

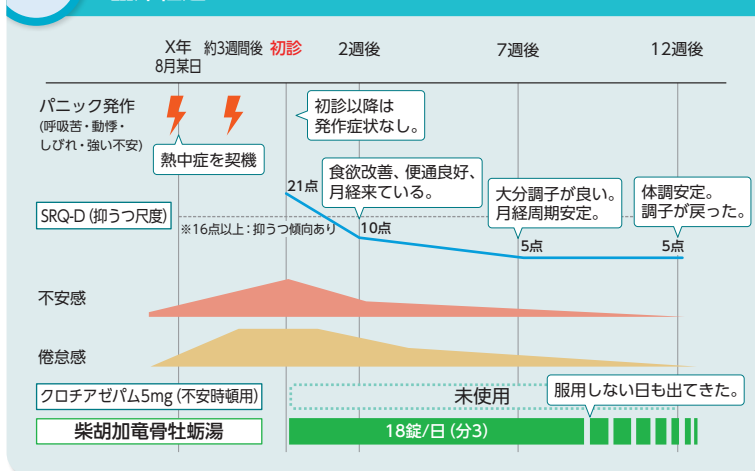


図3 柴胡加竜骨牡蛎湯について

- 肝気の鬱滞を背景とした精神不安・動悸・驚きやすさ・不眠などに用いられる。
- 虚実中間～実証、少陽病期
- 腹候：胸脇苦満・臍上悸

出典：『傷寒論』

「傷寒八九日、之を下し、胸滿 煩驚し、小便不利にして、譫語し、一身ことごとく重く、転側すべからざる者、柴胡加竜骨牡蛎湯これ主る」

肝気鬱結の病態
胸脇苦満・煩驚を目標

図4 目黒道琢『餐英館療治雑話』の記載を手がかりとしたパニック発作様症状への対応

原文の記載	「此方癇症並二癲狂二用イテ有効」 「肝鬱久シクナレバ癲症トナル。婦人別シテ肝鬱並二癲症多シ」 「シカト癇症トモ見エズ、肝鬱ニテ怒ツヨク、心腹膨脹、或ハ心下痞塞シテ胸中迄モ満ノ気味アリ、肩ハリ氣舒心アシキ…(中略)…唯胸滿ヲ標的トスベシ」	「臍下二別シテ動悸ツヨク心胸へ攻上リ、其度毎二呼吸短促シ手足拘急シ、一日二五六度若シク七八度モ発シ…(中略)…四方(桂苓白甘湯、桂苓朮甘湯、奔豚湯、五苓散)ノ内撰用スベシ」
病態の特徴	●肝鬱 ●胸滿 ●胸・腹の圧迫感、肩の張り ●発作以外にも見られる強い昂り	●臍下の動悸 ●衝き上げるような激しい動悸 ●頻回に出現する発作性症状：めまい → 水気上逆
方劑	(発作に対する)不安・緊張、胸苦しさへの対応 ▶ 柴胡加竜骨牡蛎湯	衝き上げるような動悸発作に対し ▶ 苓桂朮甘湯、奔豚湯など

Discussion

木村：予期不安が強く、胸脇苦満があるということだと、柴朴湯との鑑別が必要になると思いますが、いかがでしょうか。

磯山：本症例は動悸、予期不安がみられ、また心下痞鞭はなく、臍上悸が強かったので、竜骨・牡蛎が必要と考えて柴胡加竜骨牡蛎湯を選択しました。

木村：熱中症が契機ということになると、いつもよりも虚している状態と考えられ、柴胡桂枝乾姜湯との鑑別が必要になると思いますが、いかがでしょうか。

磯山：腹力が中等度で、冷えはない、舌診では白黄苔で便秘傾向があることから、より実証・熱証寄りの病態と捉え、大黃が配合されている柴胡加竜骨牡蛎湯が適していると考えました。

木村：錠剤を使用された理由を教えてください。

磯山：患者さんが「粉が苦手」とおっしゃったことと、便秘の状態に応じて服用量を調節しやすいことから錠剤を選択しました。